「self-to-self dialogue」を軸としたハロルド・コーエン研究 —AI と協働する際の「創造性」についての考察—

山口達典 (情報科学芸術大学院大学[IAMAS])

発表要旨：

本研究の目的は、Sundararajan によるコーエン論 (2013) を踏まえることで、40 年以上にわたって絶えず認識が変化し続けたハロルド・コーエン (1928-2016) を、彼のプログラムである AARON との関係性を軸に一貫して論じることを可能にすることである。また、それは副次的に、その他の AI 美術の「創造性」における批評に適用しようということも明らかにする。

本研究の背景には、コーエンがこれまで断片的/表面的にしか論じられてこなかったという問題がある。しかし Louise Sundararajan は、コーエンとの直接の意見交換をもとに展開した論文(2013)において Willy, 1994 を引用し、コーエンにおける AARON の存在を、Charles S. Peirce (1839-1914) の三項関係を援用し提唱された「self-to-self dialogue」、つまり「自己—他者—自己」というモデルで説明できると指摘した。Sundararajan はとりわけ言及していないが、AARON の制作を開始した三年後には既に「プログラムによって自身に変化し、長期的にはプログラムもまた変化する」(Cohen, 1976) といった記述があるほか、晩年には作品の「創造性」のクレジットをプログラマとプログラムの間にある対話の中に位置付けている (Cohen, 2010)。そうした事実からも「自己—他者—自己」という関係性は首尾一貫したものであったことは明白である。

以上を踏まえ、本研究の独自性は次の二点である。一つは、Sundararajan の指摘を支持し、それを拡大して適用することで、変遷し続けたコーエンの複雑性を一貫して論じることのできる理論的枠組みを提供する点である。そしてもう一つは、コーエンはこの関係をプログラムとプログラマの間という特定の「創造性」としたが、それをその他の AI 美術批評に適用できると主張する点である。Sundararajan が援用したのが Peirce の「三項関係」であるならば、それはコーエンと AARON という特例には収まらないことは論を俟たないだろう。

本発表はその目的を達成するため、次のように進められる。まず、コーエンの芸術観や思考の変遷を文献から辿り、それらに一貫性を持たせて論ずることの困難さを確認する。そこで Sundararajan の論を導入し、コーエンは AARON を通して絶えず「self-to-self dialogue」を行ってきたのであり、むしろ変遷こそがコーエンを一貫して論ずることを可能にする主張する。そして最後に、「三項関係」というこれまで参照されてきたモデルを導入したことで、他の AI と協働する AI 美術における「創造性」に、コーエンのモデルが適用できるという結論を導く。

主要参考文献

- Cohen, H. (1976). The Material of Symbols, First Annual Symposium on Symbols and Symbol Processes, University of Nevada.
Cohen, H. (2010). Driving the creative machine. Talk given at Orcas Center, Crossroads Lecture Series, Orcas, WA.
Sundararajan, L. (2013). Mind, machine, and creativity: An artist's perspective. *The Journal of Creative Behavior*, 48
Sundararajan, L. (2019). Harold Cohen--the last six years of a creative life. *Setu Bilingual Journal* (August 2019), 4 (3)
Wiley, N. (1994). *The semiotic self*. Chicago, IN: University of Chicago Press.